



Title	方言地理学と文法
Author(s)	渋谷, 勝己
Citation	阪大日本語研究. 2000, 12, p. 33-47
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12857
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

方言地理学と文法 Dialect Geography and Grammar

渋谷 勝己
SHIBUYA Katsumi

キーワード：方言地理学、文法、文法記述、方言間比較対照

【要旨】

本稿は、従来の、文法を対象とした方言地理学の問題点を整理し、検討を加えることによって、以下のことを指摘するものである。

- (a) これまでの方言（地理学的な）研究には、文法を対象とするしながらも、形式面にたいする配慮しかなされていない場合が多い。
 - (b) またこれまで、方言研究者、共通語文法研究者のいずれもが方言文法体系の記述を避けてきた。
 - (c) したがって方言文法研究者に課された作業には、次のようなものがあることになる。
 - (c-1) 各々の方言の文法記述を個別的に進めること
 - (c-2) 方言間比較対照を行うための分析枠を設定すること
 - (c-3) その枠を構成する意味項目ごとに各地方言の形式を地図上にプロットし、重ね合わせ法によって方言の動態を見出すこと
- このうち (c-1) が、もっとも急がれる課題である。

1. はじめに

方言地理学は体系を扱うことができない、あるいは文法レベルには対処できないといった批判が出されてから久しい。この問題にたいして方言地理学者は、分布図の重ね合わせ法といった方法をもって応えようとしたことがある。

社会言語学的な研究が方言研究界を席巻するなかで、方言地理学は現在、それほど活発に研究が行われている分野ではない。この分野は今後も停滞を続けるのか、また、文法についてはやはり対処できないのか。

本稿は、今後、文法レベルにおいて方言地理学を展開していくための課題について展望する

ことを目的とする。

2. 問題のありか

2. 1 従来の方法と問題点

Weinreich et al.(1968)によって先鞭をつけられた変異理論は、

- (a) 広義の言語変化の問題には、そもそもなぜある形式が発生したり、既存の形式－意味対応に変化が起こるのかということをめぐる始動 (actuation) の問題と、そのようにして生じた新たな形式（－意味対応）がどのようにして言語体系内部や社会に広がるのかという伝播・拡散の問題があること
- (b) ひとつの言語状態には、一見何の規則性もなく存在するかに見えるバリエーションがあるが、それは、実は秩序ある分化 (orderly differentiation) を見せること
- (c) その秩序ある分化は、(a) の伝播 (=進行中の言語変化) の過程に見出されるものであること

といったテーゼを打ち出し、言語変化を捉える新たな理論と方法を開発した。そして伝播ということをめぐっては、さらに、

- (1) 社会的伝播 (年齢・性・階層など)
- (2) 地域的伝播
- (3) スタイル的伝播 (インフォーマルからフォーマルへなど)
- (4) 語彙的伝播

などがあることを指摘し、実際にこれまで、世界各地で、詳細な研究を進めてきた。

これらの研究は、確かに一方では、それまで体系化が不可能であるとされてきた言語のバリエーションに秩序を見出すことに成功し、また言語変化研究において一定の成果をあげたことはまちがいない。

しかし一方では、上のような伝播ということの認識から、意味の問題を消し去ってしまったこともまた確かである。ラボフ流の変異理論では、Labov (1969)などを除いて、その出発点に「意味的同一性 (referential sameness)」という前提を設けることが多いために、そもそも意味の問題は最初から切り捨てられているのである (Milroy 1987: ch 7の議論も参照)。変異理論的な観点からする方言研究 (社会方言学) が形式だけに固執するのも、このためである。このことはまた、日本が独自に展開してきた方言地理学の方法についてもあてはまる。

これにたいして近年の文法化の研究は、内容語や既存の文法形式に変化が起こる場合には、当該形式がこれまでに使用されることのなかった環境のもとでも使用が可能になるという変化

だけでなく、形式そのものが縮約し、またそれにともなってその文法的な意味も、性質を変えることがあるということを明らかにした。このような変化は、方言形式の伝播という時間軸上で展開するできごとにおいても、当然予想されるものである。

このような、言語変化における形式と意味・機能の連関の問題をめぐって方言地理学では、たとえば方言地図を作成する場合、変異理論の方法と同様に、一枚一枚に描き出す項目の意味をひとつのものに固定し（referential sameness）、同じ単語が表すかもしれない隣接する意味を切り捨てることによって、避けってきたところがある。徳川（1993[1975]:52）はこれを「不満」と捉え、次のような解決策を述べている（図1参照）。

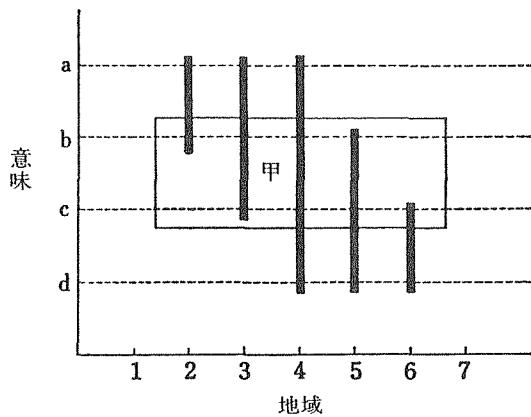


図1 徳川（1993[1975]）のモデル

その不満を解消するためには、a断面を基準とした地図のほかに、b・c・d……などの断面を基準とした地図をさらに何枚も作り、それらを重ね合わせ、いわば単語の地理的分布の立体構造を明らかにする以外には、方法はないのであろう。しかし、これを行なうためには、すぐ次に意味空間に関する一般理論の問題が控えており、この種の徹底的な研究はまだない、と言わざるをえない。将来に期待される研究分野である。

徳川と同じ種類の「不満」は、山口（1984:104、105-6）によっても述べられている。次のようにある。

いわゆる言語地理学的調査に採用される文法項目等が、しばしばあまりにも単語的であって、体系的な位置づけはむしろ疎んじる傾向が見られるのである。

あるいは、

文法形式については、その文法上の区分を明らかにしつつする調査の地点集計でな

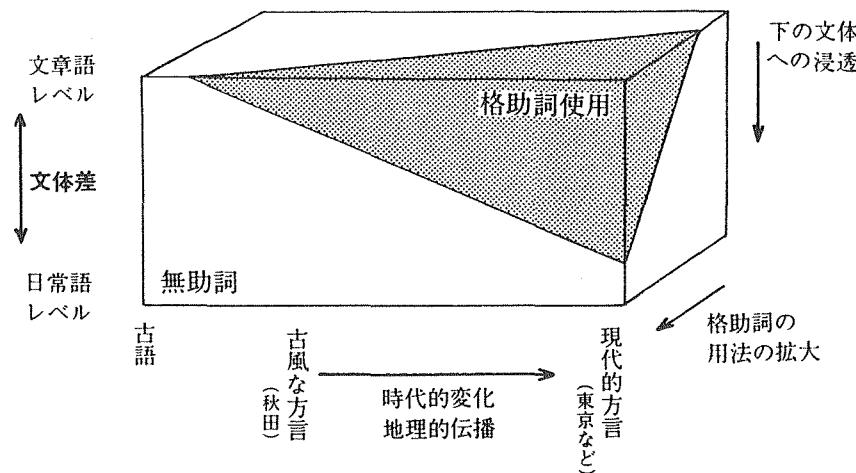


図2 井上(1992)のモデル

ければ、眞の比較つまり言語地理的対照とはなりえず、したがって言語地理学的解釈は成立すべく由もない。(中略)筆者は構造無視の言語地理学には批判的とならざるをえない。

徳川の提示したモデルは、井上史雄によって、歴史社会言語学的な枠組みのなかで、格助詞使用の拡大という具体的な問題を対象として図2のようなモデルに拡張されたが(井上1992)、その「格助詞の用法の拡大」の軸には、徳川や山口が指摘した問題がそのまま持ち込まれている。

では、徳川のいう「立体構造」あるいは「意味空間に関する一般理論」とは、どのようなものを考えるべきなのであろうか。次に、方言地理学を文法に適用した場合を対象にして、このことについて考えてみる。

2. 2 従来の体系的（構造）方言地理学研究

これまで行われてきた、体系に対処しようとする方言地理学研究は、基本的には、図1のa、b、c、dそれぞれの意味について1枚1枚作成した地図を重ね合わせて総合するという手法を用いるものであった。研究の枠について意味領域を出発点とするか形式に主眼をおくかによって、次の二つのタイプのものがある。

- (a) 意味領域優先型重ね合わせ法
- (b) 形式優先型重ね合わせ法

これらは、本質的にはいずれも、現代語研究、古典語研究などにおいても採られることのあ

る手法であり、特に方言研究に限定されるものではない。次のような種類のものである。

2. 2. 1 意味領域優先型重ね合わせ法

文法体系をめぐる方言地理学について概観するまえに、まず、語彙を取り上げたケースについて見てみよう。一定の意味領域について議論した古典的な例に、虫の名前（「こおろぎ」と「ぱった」）を取り上げた真田（1973）や、日の呼び方（「あさっての次の日」と「あさっての翌々日」）を分析した佐藤（1975）などがある。これらはいずれも、次のようなプロセスを踏むものであった。

- (a) まず、使用される形式が錯綜しそうな、関連する（緊密な体系を構成する）複数の意味項目（＝総合して「意味領域」）を、研究対象として設定する
 - (b) それぞれの意味項目について調査を行い、複数の方言地図を作成する
 - (c) そのようにして作成した各々の地図を照合し（重ね合わせ）ながら解釈を加える
- ここで使用される地図（意味項目）は、一般に、2枚（2項目）、あるいは多くて数枚（数項目）程度であることが多い。

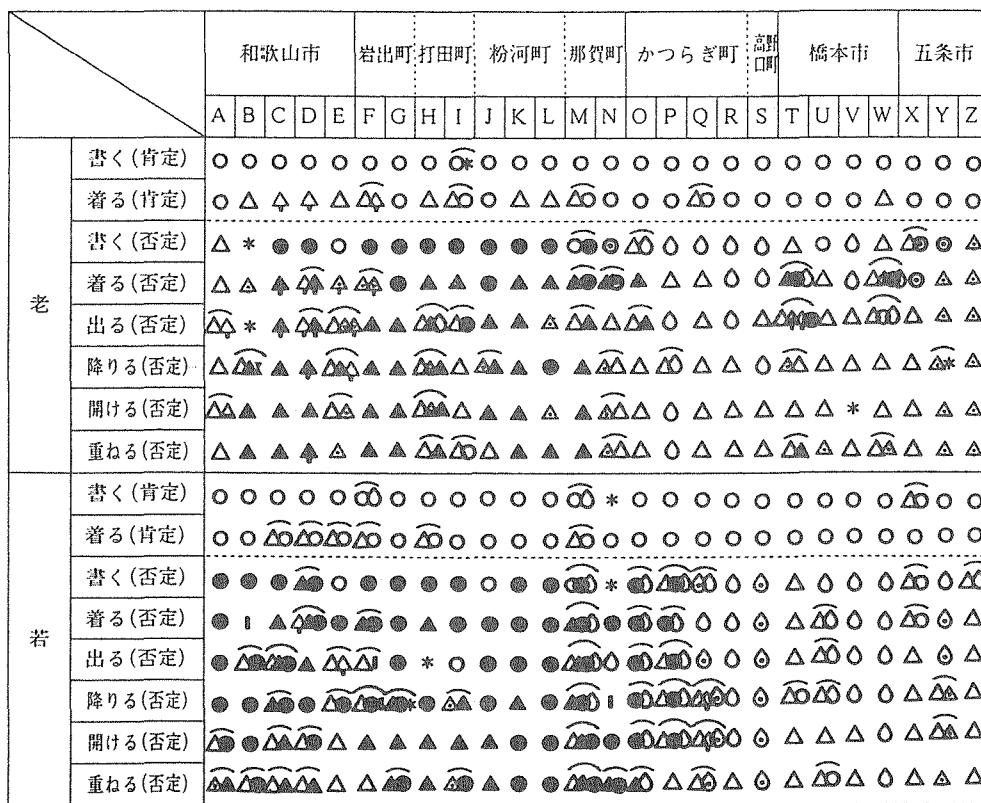
文法事象を対象とした『方言文法全国地図』（1989-、以下GAJと略称）なども、基本的にこの方法を踏襲している。

一方、図3や図4は、通常のグロットグラム（地理×年齢図）の「年齢」のかわりに、動詞の活用や語幹の拍数などの「言語内的制約条件」や「意味」をとったものである。図3は和歌山県和歌山市（A）から奈良県五條市（Z）にかけて行った調査の結果（徳川・真田1986）、図4は和歌山県新宮市（A）から奈良県御所市（Z、ただし五條市・御所市部分省略）にかけての調査結果（渋谷1993:141）で、いずれも可能文に関する部分を抜き出した。ここで図3が注目したのはラ抜きことばの語彙的伝播のありかたであり、変異理論の方法と同様に状況可能に意味を固定することによって、形式面での変化の進行状況を、動詞語幹の拍数と相関させつつ浮き彫りにしようとしている。一方図4では、調査文に、動詞の活用のほか、能力可能と状況可能（外的条件可能）という意味項目をも盛り込むことによって、言語変化に意味がどうかわかるかを明らかにすることを試みた。

なお可能文については、GAJ第4集でも扱われているが、GAJではさらに属性可能も加えられ、意味の網の目が細かくなっている。

2. 2. 2 形式優先型重ね合わせ法

文法事象における方言地理学の方法にはほかに、分析の対象を一つの形式だけに限定して、その表す意味の地域的な変異を考察しようとするタイプのものがある。たとえば格助詞のサを



凡例

「書く」 「着る」

▲ カカレン	キラレン	△ カカレヘン (カカレル)	キラレヘン (キラレル)	▲ カカレヤン	キラレヤン
△	キヤレン	△	キヤレヘン (キヤレル)	△	キヤレヤン
◎ カケン	キレン	○ カケヘン (カケル)	キレヘン (キレル)	● カケヤン	キレヤン
● カケレン	キレレン	○ カケレヘン (カケレル)	キレレヘン	● カケレヤン	キレレヤン
□ ヨーカカン (ヨーカク)	ヨーキン (ヨーキル)	△ カカレエン	キラレエン		
■	ヨーキヤン		鳳 ヨーキヤヘン	カケナイ	キレナイ
▣	ヨーキラン		鳳 ヨーキラヘン	カ	キラレナイ
■ ヨーカケン (ヨーカケル)	ヨーキレーン (ヨーキレル)		鳳 ヨーキレヘン	*その他	
■	ヨーキラレン (ヨーキラレル)				

図3 和歌山～五條グロットグラム（徳川・真田1986）

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V
68(能・一・肯)	△□●△□	△●	□△□	△△□△	△	□△	□△□	△	△	△	△	△	△	△	△ △	△	△	△	△	△	△□	△□
69(能・一・否)	△	△	△●	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	—	△	△	△	△	△	△	△	△
70(能・五・肯)	△	□	△	□	△	△□	△	□	△	□	□	□	□	□	△	△	△□	△	△	△	△□	△□
71(能・五・否)	△	△	△	□	△	△□	△	△	△	△	△	△	△	□	△	△	△	△	△	△	△	△□
72(外・一・肯)	●	●	●	●	○	□	—	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	●	●	●
73(外・一・否)	□	●	●	●	—	●	—	□	□	□	□	□	□	—	□	□	□	□	—	●	□	□
74(外・五・肯)	—	□	□	□	□	□	—	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□
75(外・五・否)	□	□	□	□	□	—	□	—	□	□	□	□	□	□		□	□	□	□			□

(凡例) ● 補助動詞エル系 □ 可能動詞系 △ 副詞ヨー系
| 助動詞ラレル系 — その他

図4 新宮～御所グロットグラム（渋谷1993）

取り上げた小林（1995）などがそれで、GAJ第1集のなかから東北地方で格助詞サが使われる地図9面を取り出し、「地理」（グロットグラムと異なり、「面」を扱う）と「その表す意味」という二つの側面を考慮しつつ、その変化の過程を跡づけようとしたものである。渋谷（1999b）も、小林ほどの多くの地点のデータがないために粗雑な議論になってしまっているが、そのような試みを目指して行った基礎的な対照研究である。意味の面を深く掘り下げたつもりである。

2. 2. 3 問題点

以上、これまでの方法を振り返ってみると、技術の制約上、地図の重ね合わせということはやむをえないこととして、上のそれぞれの方法について次のような問題点が指摘される。

意味領域優先型重ね合わせ法については、そもそも、（A）意味領域（部分体系）の外枠をどのように設定するのか、また、（B）その内部を構成する意味項目（図1のa、b、c、d……）をいくつ設定すればよいのかという問題がある。可能文の例でいえば、GAJが取り上げた属性可能是可能の意味領域の内か外か（（A）の問題）、可能の意味項目は能力・状況・属性だけで十分か（（B）の問題）、といった問題である。Muysken（1981）や工藤（2000）のように、テンス・アスペクト・ムード（TAM）を総合的・連続的に把握しようとする立場を採った場合などには、この問題は特に大きなものとなる。

一方、形式優先型重ね合わせ法には、対立する形式が考慮されていない（アトミズム）という短所があることは明らかであろう。研究の出発点として採用する意義はもちろんあるが、文法における方言地理学研究が目指す最終的な目標とはなりえない。

ここで、形式優先型重ね合わせ法の問題点に対処して他の対立形式にも配慮することは、結

果的には、意味領域優先型重ね合わせ法を採用することと同じことになる。そこで以下では、意味領域優先型重ね合わせ法の問題をめぐって考察することにする。

3. 方言地理学における文法体系

本節では、方言地理学が、意味領域優先型重ね合わせ法を採用しつつ、文法事象を研究対象に据えようとするときに、研究の現状にどのような問題点があるのか（§ 3.1）、また、このことをうけて、今後取り組むべき課題にはどのようなものがあるのか（§ 3.2）といったことを中心に、いくつかの方法論的な問題について考えてみることにする。

3. 1 研究の現状：方言研究者の文法認識

現在刊行中の『日本列島方言叢書』（ゆまに書房刊）のうち、『九州方言考5』までの既刊分27冊に収録された論文の内容構成は、「方言概説・総論」131本、「音韻」114本、「アクセント」211本、「文法」261本、「語彙」23本、「言語地理学」63本、「社会言語学」48本であり、文法は第1位にある。

また真田（1984）は、方言研究の跡を振り返って、1950年代を記述的研究の時代、1960年代を地理的研究の時代、1970年代を社会的研究の時代、1980年代を計量的研究の時代と位置づけており、かつて、記述研究のなかで文法研究が活発に行われた事実があることを示唆している。

しかし一方では、方言研究界には以前から、文法研究の、質・量両面での貧困さをなげく声が跡をたたない。

これまでの方言研究のおおきな欠点の一つは、方言を体系的にあつかわなかったことです。（中略）しかし、体系のなさということは、方言文法にかぎらず（宮島1956:57）といった古いものから、

残念ながら方言を対象とした文法研究は、一九七〇年現在現われている限りではまことに不振といわざるをえない。文法理論の変転のすさまじさに気押されてこのような状態を招いたのかもしれないが、残念至極と言うほかはない（徳川1994[1970]:430）などを経て、

方言の記述的研究は、音韻、アクセント、形態論的文法〔同論文338ペである活用体系、語形分析、結合規則等のことか〕の面では昭和五十年ごろまでにあるレベルに達したが、シンタクス、意味論、語彙論ではまだ模索状態である（加藤1995:340）といった最近のものまで、数多く見出される。

では、『日本列島方言叢書』が収録した文法関係の論文はどのようなものなのか。また、真田が指摘する1950年代の記述研究とはどのようなものだったであろうか。

まず、『日本列島方言叢書』所収の文法関係の論考を分類してみると、いわゆる文法概説（方言特有の形式に簡単な説明を付して全体を総覧したもの）や、活用（方言地理学的研究・社会言語学的研究を含む）、待遇表現を取り上げたものが多い。一方、格やヴォイス、アスペクト、テンス、ムード、複文など、共通語文法が近年精力的に分析に取り組んできた文法カテゴリ等のいずれかを、一本の論文で徹底して記述したものは、数えるほどしかない。また、刊行された年代を見ても、文法関係261本のうち1969年までが143本で過半数を占め、1970年代が47本、1980年代が70本を数えるだけである（残り1本は1990年代のもの）。1980年代の70本にしても、文法形式の意味・機能に注目する記述研究は、待遇表現に関するものを除けば30本程度に過ぎず、その半数が九州方言に関するもので、しかも同じ著者による研究が目につく。

次に、1950年代前後における文法記述を『日本方言研究の歩み 文献目録』（1990、角川書店）などからひろってみると、次のようなものがある。藤原与一『日本方言文法の研究』（1949）、『方言研究年報1 文末助詞』（1957）、国立国語研究所『日本方言の記述的研究』（1959、秀英出版）、『国語学』41（1960、特輯琉球）、『方言学講座』（1961-2）。国立国語研究所の地方研究員が各地方言の記述報告書（稿本・自筆本）を作成したのも、ほぼこの時期である。しかし、宮島（1956）が文法記述の不十分さを嘆いたのはまさにこの時期のことであり、また加藤（1995）が指摘するように、当時行われた文法記述は、ここでも、主として形態面の整理や、方言文法形式の列挙とその簡単な意味解説に限られていた。

ちなみに、刊行中のGAJでも、たとえばアスペクトについては、共通語のル形・タ形相当形式（完成相形式）は動詞の活用を扱った第2集に、また継続相形式は第4集に収録されている。同様に、条件表現については、第4集解説129ページで条件表現関連項目が一覧できるようになってはいるものの、「寒いけれどもがまんしよう」の「寒いけれども」は助詞の形態を扱った第1集に、「あした雨が降れば船は出ないだろう」の「降れば」や「あした雨が降ったらおれは行かない」の「降ったら」は第4集に収録され、形態（活用）優先的な編集方針はまだ根強い。確かにル形やタ形をどの文法カテゴリで取り上げるかには議論があろうが、40年以上前に宮島（1956）が指摘した問題点が十分に検討されているとは思われない。

以上、『日本列島方言叢書』や1950年前後の研究に確認したような、方言文法研究における形式・要素重視の偏向ということの背景には、1950年代の記述研究を支えた構造主義が形態論までしか扱えないといった言語理論の限界なども関連しているよう。しかし、その後1970年代になって共通語のシントックスや意味を対象とする文法研究が進んでも方言文法記述の作業が進

まなかつたことには、1960年代以降、言語地理学や社会言語学的な方言研究に専念するようになった方言研究者が、方言文法記述を自分たちの仕事の範囲から除外するといった考え方がなかったかどうか、反省してみる必要がある。次のような考え方である。

従来ややもすれば「なんとか県、なに村の……」といった題目の論文があれば単純に方言研究の中に分類され、他の研究分野の人からは一顧だにされないことを通例としてきた。(中略)「なんとか村のアクセント」とか「なんとか島の方言の動詞」といった論文が、もし、記述(法)に中心をおいて他方言との比較をしていないのなら、方言研究に分類するのはおかしな話である。それらは「現代語の音韻分析」式のものと同質のものを含んでいる。(徳川 1994[1970]:425)

このようにして方言文法の研究は、散発的に行われたいいくつかの記述を除けば、比較に没頭する方言研究者、共通語のみに注目する文法研究者のいずれからも注意を払われることなく、いわば研究の空き間として残されるという事態が生じたわけである。意味のネットワーク(徳川のいう「立体構造」あるいは「意味空間に関する一般理論」)を考慮しなければならない文法レベルの方言地理学研究にとってこのことは、発達をさまたげる大きな要因となった。

3. 2 方言地理学研究をめざした文法研究

では、文法レベルにおける方言地理学を行っていくためには、どのような作業が必要なのであろうか。

ここでは、次の二つの作業をあげておこう。

(a) 体系内記述

(b) 体系間比較対照による汎方言的な意味領域、意味項目の設定

いずれも言語学の分野においては当然の作業であるが、いつのまにか記述言語学や類型論研究と一線を画すようになった方言文法研究では、等閑視されているものである。

(a) の体系内記述は、共通語の文法研究と同じように、一方言におけるある文法領域についての細かな記述を行うことである。作業はもちろん、部分体系の記述を積み重ねるというかたちで進むであろうが、最終的には、各方言について、Martin (1988) や寺村 (1982・1984・1991) のような reference grammar を作ることが目標となる。このような文法書は、此島(1968) や山形県方言研究会 (1972)、神部 (1978)、内間 (1984)、宮良 (1995) のような部分的な試みはあるものの、網羅的なかたちではまだどの方言についても書かれていません。

一方、(b) の、方言間に共通の分析枠(対照言語学でいう *tertium comparationis*、石綿・高田 1990:12-6)を設定する作業は、(a) の各地方言の記述の結果を統合する試みである。言語間の類似点と相違点を整理するという点で、類型論研究の作業に類似するところが多い。し

たがってここでの問題点は、例の、「体系とは、それ自身のなかで完結する」というテーマをいかに克服するかということにある。換言すれば、各方言の文法要素は、互いに比較可能なのか、といった問題である。

この、比較可能性ということについては、文法カテゴリの間で違いがあることが予想される。おそらく、格やヴォイス、アスペクト、テンスなど、命題寄りのカテゴリは、日本語のどの方言（あるいは世界のどの言語）でもなんらかのかたちで文法化されていることが多く、またそれぞれのカテゴリ内部についても、方言間（言語間）で共通の意味項目や分類枠を設定し、類型化することが、比較的容易なところであろう。たとえば工藤（1998）は、西日本諸方言のアスペクトを分析するのに、主体変化動詞・主体動作客体変化動詞・主体動作動詞・心理動詞・可能/超過動詞・存在動詞などの動詞のタイプと、直前・過程・結果・痕跡・経験記録・反復習慣といったアスペクト的意味を組み合わせることによって参照枠を作り、その動態を描き出すことに成功している。また渋谷（1993）は、可能文の意味について、「心情－能力－内的条件－外的条件（－自発）」からなる連続的なスケールを設定して、全国方言や過去の日本語の可能文の、静的・動態的特徴を捉えることを試みた。

これにたいして、事態とのかかわりが弱いムードやモダリティについては、方言間の比較対照が可能かどうかということに疑問がある。その典型的な例として、ここでは日本語方言の文末詞（不変化詞）を考えてみよう。たとえば小野（1993）が取り上げた旭川市方言の文末詞と山形市方言のそれを部分的に対比してみると、次のようになる（順番は小野に従う。小野の分類枠や分析が妥当なものか否かについては今は問わない）。

旭川市方言 ナネヨヤサゾデジャカカイノトテベチャワ

山形市方言 ナネヨヤーザー ガー ノドテベー

ここでは旭川市方言の文末詞のほうが多いように見えるが、山形市方言にはほかに、ケ（渋谷1999b）・ジェ・ズ（渋谷2000a）・ス・バ・ハ（渋谷1999a）などがあってやはり多様な分化を見せてている。

これらのムード形式について方言地理学的にアプローチしようとする場合には、これまで述べたこととも関連して、次のような問題を解決しておく必要があろう。

（1）個々の形式の意味・機能の記述の問題

上記（a）の体系内記述ということに関連して、これらの文末詞は、表面上は方言間で同じかたちをしていても、意味・機能、あるいは属する文法カテゴリも同じであるという保証はまったくない。むしろ、小林（1995）の取り上げた各地の格助詞サに見るように、まずは異なるものと考えて記述を行ったほうが、方法的には妥当であろう。また意味記述を行う場合には、どのようなメタ言語（術語）を用いるかという問題もある。同じ内容のことについても異

なった術語を用いていたり、違った内容のことを述べていても同じ術語を用いていたりすることがある（渋谷1999b:229、注8のイ参照）。

（2）ムードの分節のありかた

旭川市方言と山形市方言を対照してみると、一方の方言に存在する形式が他方言にはないというケースがあるが（旭川市方言のサ・デ・ジャ、山形市方言のジェ・ズ・ハなど）、そもそもムードには、アスペクト・テンスレベルにおける、

	非過去	過去
完成相	ル	タ
継続相	テイル	ティタ

のような（奥田1978、高橋1985）、二つの形式が互いに対立して構成する緊密な体系があるかどうかということも、よくわかっていない。この問題について渋谷（1999a、2000a）では、ひとつ文末詞を、とりあえずゼロの場合（当該文末詞がつかない場合）と対立させるかたちで記述を進め、文末詞のカテゴリ的体系化（がそもそも可能であるかどうかの検討）は、課題として先に持ち越した。

また、個々の文法カテゴリやその対立を構成する諸形式について Dixon（1997:120）は、アマゾン川流域に分布する諸言語の証拠性（evidentiality）をめぐる形式分化を例にして、複数の言語における多元的発生の可能性を指摘し、そのような形式が繰り返し発生する理由を、

It appears that the cultural orientation of people in the Amazon basin is such that they tend to evolve ‘nature of evidence’ as an obligatory grammatical systems.

といった、この地域の文化の特徴に求めている（Aikhenvald & Dixon 1998も参照）。日本語でも古典語には証拠性に関する形式があったとされるが、Dixon らの、文法カテゴリは文化的な特徴を反映して生じ、分化することがあるというテーゼが正しいとすれば、文法カテゴリやカテゴリを構成する個々の形式は、日本の内部でも、文化や自然など、言語を取り巻く事象の地域的な異なりに応じて多彩に分化している可能性があることになる。もしそのような実態が将来明らかにされたとすれば、方言間の比較対照は、大まかなレベルでの類型化は可能だとしても、方言地理学に要求されるような細かなレベルではますます困難なものになることが予想されるであろう。

いずれにしても、類型論研究で見出された accessibility hierarchy (Keenan & Comrie 1977) や他動性プロトタイプ (Hopper & Thompson 1980)、所有傾斜（角田1991）のような、言語間に妥当な一定のものさしや分類枠が方言間にも用意されれば、方言間の比較対照作業はより整理されたかたちで進められることは間違いない。個別の形式の記述を積み重ねつつ、それぞれの方言の文法体系を類型的に描き出していくことが、伝統的な方言が消滅の危機に瀕してい

るいま、方言文法研究に求められている緊急の課題であるといえるであろう。

4.まとめ：展望

以上本稿では、文法を対象とした方言地理学の問題点を整理し、検討を加えた。要点をまとめると、次のようになる。

- (a) これまでの方言（地理学的な）研究には、文法を対象とするしながらも、形式面にたいする配慮しかなされていない場合が多い。
- (b) またこれまで、方言研究者、共通語文法研究者のいずれもが方言文法体系の記述を避けてきた。
- (c) したがって方言文法研究者に課された作業には、次のようなものがあることになる。
 - (c-1) 各々の方言の文法記述を個別的に進めること
 - (c-2) 方言間比較対照を行うための分析枠を設定すること
 - (c-3) その枠を構成する意味項目ごとに各地方言の形式を地図上にプロットし、重ね合わせ法によって方言の動態を見出すこと

このうち (c-1) が、もっとも急がれる課題である。

なお、(c-2) で採用される分析枠を構成する意味項目は、おそらく膨大なものになるであろう。たとえば可能文では、関西・西日本方言のヨーの動態を把握しようとするだけでも、極性（肯定の 2）×意味（心情・能力・内的・外的の 4、ここはさらに増やすことができる）×人称（1 - 3 人称と全称の 4）×テンス（過去・現在・未来の 3）= 96 項目が必要になる（渋谷 1998）。また、工藤真由美・木部暢子を中心とするグループは、全国諸方言のアスペクト・テンス（・ムード）を対象に、600 強の調査項目をもつ調査票を作成して調査を進めているという。GAJ はその第 1 集を格などに、またその第 2 集・第 3 集を用言の活用にあてているが、本稿で提示した方法にしたがえば、ヴォイスや可能、アスペクト・テンス・ムード、条件文などについても、それぞれ複数の巻を用意することが必要だということになる。

もっとも、そのような多数の、しかもインフォーマントの興味をひかない項目をどうやって調査するか、また、文末詞のような汎用性のある、したがって非文が作りにくい項目をどうやって調査するかといった調査法の問題は課題として残る（渋谷 2000b）。調査地点数を減らすなどして労力をストックすることは可能であろうが、大きな課題であることはまちがいない。

以上本稿では、徳川（1993[1975]）や、徳川（1994[1970]）などを出発点として、筆者の考える方言文法地理学の構想をまとめてみた。徳川先生がお読みくださった、「またむずかしいこと言っちゃって。そんなことできるかどうか、まず自分でやってみたら。」とでもおっし

やってくださるだろうか。今後の研究を約束し、もって追悼文としたい。

【参考文献】

- 石綿敏雄・高田誠 1990『対照言語学』おうふう
- 井上史雄 1992『社会言語学と方言文法』『日本語学』11-6
- 内間直仁 1984『琉球方言文法の研究』笠間書院
- 奥田靖雄 1978「アスペクトの研究をめぐって－金田一の段階－」『宮城教育大学国語国文』8
- 小野米一 1993「北海道方言の文末詞－旭川市方言の場合－」『北海道方言の研究』学芸図書
- 加藤正信 1995「方言」『国語学の五十年』武蔵野書院
- 神部宏泰 1978『隠岐方言の研究』風間書房
- 此島正年 1968『青森県の方言』津軽書房
- 小林隆 1995「東北方言における格助詞『サ』の分布と歴史」『東北大学文学部研究年報』44
- 工藤真由美 1998「西日本諸方言と一般アスペクト論」『月刊言語』27-7
- 2000「八丈方言のアスペクト・テンス・ムード」『阪大日本語研究』12
- 佐藤亮一 1975「言語地図からみた『しあさって』と『やのあさって』」『言語生活』284
- 真田信治 1973「東北地方における『いなご』と『ばった』の方言分布とその解釈－故小林好日博士の調査
資料を地図化して－」『国語学研究』12
- 1984「社会言語学と方言」『国文学解釈と鑑賞』49-7
- 渋谷勝己 1993「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33-1
- 1998「文法変化と方言－関西方言の可能表現をめぐって－」『月刊言語』27-7
- 1999a「山形市方言の文末詞ハ」『阪大社会言語学研究ノート』1
- 1999b「文末詞ケ－三つの体系における対照研究－」『近代語研究第十集』武蔵野書院
- 2000a「山形市方言の文末詞ズ」『阪大社会言語学研究ノート』2
- 2000b「徳島県海部郡方言の可能表現」『阪大社会言語学研究ノート』2
- 高橋太郎 1985『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
- 角田太作 1991『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 寺村秀夫 1982『日本語のシントクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 1984『日本語のシントクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- 1991『日本語のシントクスと意味Ⅲ』くろしお出版
- 徳川宗賢 1993[1975]「方言の地理的分布－特に分布の内容について－」『方言地理学の展開』ひつじ書房
- 1994[1970]「方言研究の展望」『日本語研究と教育の道』明治書院
- ・真田信治 1986「和歌山県紀ノ川流域の言語調査報告」『日本学報』5
- 宮島達夫 1956「文法体系について－方言文法のために－」『国語学』25
- 宮良信詳 1995『南琉球・八重山・石垣方言の文法』くろしお出版
- 山形県方言研究会 1972『山形県方言概説』山形県方言研究会
- 山口幸洋 1984「方言の対照的研究－比較構造方言学への道－」『講座方言学2 方言研究法』国書刊行会
- Aikhenvald, A.Y. and R.M.W.Dixon 1998 Evidentials and areal typology: a case study from Amazonia. *Language Sciences* 20:241-57.

- Dixon, R.M.W. 1997 *The Rise and Fall of Languages*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hopper, P. and S.Thompson 1980 Transitivity in grammar and discourse. *Language* 56: 251-99.
- Keenan, E.and B. Comrie 1977 NP accessibility and universal grammar. *Linguistic Inquiry* 8: 63-100.
- Labov, W. 1969 Contraction, deletion, and inherent variability of the English copula. *Language* 45: 715-62.
- Martin, S.1988[1975] *A Reference Grammar of Japanese*. Tokyo: Tuttle.
- Milroy, L. 1987 *Observing and Analysing Natural Language*. Oxford: Blackwell.
- Muysken, P.1981 Creole tense/mood/aspect systems: the unmarked case? In P.Muysken ed. *Generative Studies on Creole Languages*. Dordrecht: Foris.
- Weinreich, W., W. Labov and M.Herzog 1968 Empirical foundations for a theory of language change. In W.P.Lehmann and Y .Malkiel eds. *Directions in Historical Linguistics*. Austin: University of Texas Press, pp.95-195.

しぶや かつみ (文学研究科助教授)